



No. 27

発行所 社会福祉法人
山形県手をつなぐ親の会
事務所
山形市旅籠町
1丁目10番30号
山形県社会福祉会館内
TEL 山形 6572
印刷所
K.K. 誠文堂印刷所

あせらず・くじけず・怠らず

会長 中村 律

昭和五十四年度から養護学校が義務制になる。つまり、だれでも、どんなに障害が重くてもみんな学校教育をうけられるようになる。これは画期的なでき事である。いままでは知能指数が低いというだけで教育の場からはじき出され、見放されてきたこともたちに、学校教育が義務づけられるのであるからまさに教育理念の大転換を迫られるわけである。ところでこんな大改革を行わせるように、大きく時の流れを方向づけたものはなんだろう。それは二十年前学校に入れようとしても特殊学級がない、施設に入れたくても施設がない。そんな、おさき真暗な状況の中で、どうしたらいいか、なんとかしなければ……。という親たちの心が一つになって「手をつなぐ親の会」をつくって、養護学校設置の陳情を

はじめたのが、その原点であるといっても過言ではないだろう。「親の会」では、これまで自分たちでやることは自分たちでやり、どうしても手におえないことは、国や公共団体に陳情するという姿勢で運動をしてきた。そういう地道な運動の積み上げが二十年経過して養護学校義務制という一つの実を結んだといえるだろう。これは「手をつなぐ親の会」運動の大きな成果である。ところで、近ごろは権利意識だけが強くて、やるべきことをやらない傾向があるということをよく耳にする。たとえば知



—米沢市内の事業所で働く寮生—

恵おくれの子どもについても、当然国や公共団体がなんとか処置すべきだと、恰かも国や公共団体に子どもを育てる責任があるかのような調子で、なんでも要望した陳情だというのは考えものである。子どもを育てる責任はあくまで親にあることを忘れてはならないと思う。親としてなにをやるべきか、先ずやれるだけのことをやるといふ前向きな姿勢が是非欲しいものである。また「手をつなぐ親の会」の運動についても、自分のことまじりに真剣に考えると、一緒にほかのみんなのことを考えながら全体としての福祉対策をすすめていくようにしたいものである。い

ま、特に全体として取組んでいきたいのは、各地に小規模授産施設と通勤寮をつくることをみんなで考えていきたいところである。親たちで知恵と勇気を出し合い、先ず取組んでみてその上で県や市に協力をもとめるようにしていきたいものである。まだまだ子どもたちの生涯を通じて解決を迫られている困難な問題が山積している。これを誰かがなんとか考えてくれるだろうというような甘い考えはすてねばならない。先ず親自身が真正面からこれと取組んでなんとか解決しようと努力する姿勢が一番肝心である。それがやがて社会を動かす原動力になることをもう一度思い返したいものである。もともと、この運動はむずかしい要素をたくさんふくんでいて、一回や二回の陳情で解決できるような生やさしいものではない。みんなで知恵と努力を惜しまずに、理想に向って、あせらず、くじけず、怠らず頑張っていくほかに方法はないのである。

万世通勤寮だより

戸田 信雄

万世通勤寮は、開所以来すでに二年六か月を経過しようとしております。入寮当初に見られた寮生の環境に対する変化と、社会生活に対する不安定な状態も現在ではすっかり安

定し、社会人であるという自覚と誇りを持って、毎日元気にそれぞれの職場に勤めております。

職場における寮生の仕事ぶりは、早や、企業のりっぱな戦力になってる者もおり、事業主の方からも大へん喜ばれている次第です。

これは寮生自身の努力による進歩は勿論のこと、各事業所の方々の心暖まるご指導とご理解によるもので着実に一歩一歩社会人として歩んでいます。

しかし、きびしい世の中の荒波にひとり立ちするには、まだまだ多くの問題をかかえております。今後いっそう周囲のひとびとの理解と援護が必要であると感じております。

寮での私のくらし

H・H 子

アツデンの会社にはいってよかったです。会社のおばさん方は仕事をしているとき、とてもしんせつにしてくれます。広子はあんしてしています。またおもしろくわらって仕事をしています。

ほんとうにアツデン会社に勤めてよかったです。会社のかえりにマイクロスバスに、だまっていたのとねむくなります。熊野たつお先生にラジオをかけてもらったので、たいせつにつかっています。

うでどけいもたいせつにかけています。たつお先生はおもしろい先生でした。

おふるに、たまにおばさんとはいることがあって、おもしろい話をしています。

私の希望

H・K 子

私は、今万世通勤寮から栄光園にかよっています。仕事は、おりのものです。私は体がよわいので、今のところ体によくきをつけています。日本人の中でも、よわい人がたくさんいます。私だけが体がよわいのではないと思います。たくさんの人たちが、びょうきをしたりしています。

私は栄光園にかよっています。が、げんざいの会社の中はふけいきで、やめさせられる人もいます。きいています。私は寮のある会社につとめて、一年ぐらい寮からかよって友だちができて、会社の人たちと生活ができたならば会社の寮にはいらたいと思います。そして母ときょうだいをあんしんさせたいと思います。そ

して一人で生活ができて、給料もたくさんもらえたら、自分でアパートでもかりて生活をします。私のげんざい考えていることなのです。

事業所見学に参加して

参加して

寮生の兄 K・T

通勤寮への入寮当時、われわれ保護者としては、実社会へ出すよるこびと、果してみんなと一緒に仕事ができるだろうかという心配でいっぱいでした。

先生方のご指導と、各事業所のご理解のお陰で、三年目を迎えた今日とても寮生たちは、明かろく仕事も覚え、りっぱに成長しております。このたび、米沢市内の子どもらが世話になっている事業所見学に参加しました。

直接仕事をやっている所を見て廻り、話を聞いてきました。どの事業所に行っても明るく親切で、親、兄弟でもできない程に、ていねいに教えていただく様子を知り、頭のさがる思いでした。

このことは、われわれ保護者ひとりだけでなく、家庭に帰ってからもみんなと話し合い、明るい家庭の和をつくり、ひいては各地区の人々に呼びかけ、理解を求めて、大きな輪をつくり、各事業所の発展に努力すべきではないでしょうか。

寮生たちが、どの職場に行ってもみんなから喜ばれることは、毎日の生活の中で蓄積された先生方のご指導の賜ものと思えました。

——事業所見学に参加した保護者たち——



生活指導について

栄光園指導員

大橋ひろ子

生活指導といわれることをやり始めてから三年目を迎える。

この間、園生の私物の整理整頓と身のまわりの清潔を重点目標に、週一回四十分の生活指導に当たってきた。

ある園生にとっては、その時間はきかえの時間だったし、又、ある園生にとっては下着をたたんでしまうだけで終わる時間であり、又、ある園生にとっては洗濯をするように指示される時間だった。毎週毎週が、くりかえしの連続で、生活指導に当たる私自身も同じ言葉は何回もくり



寮生はマイクロバスで事業所へ

かえしてきた。

生活指導においては、基本的な生活の習慣を身につけさせることが、第一の大切な課題である。この「習慣を身につける」という習慣化は、施設においては、そう難しいことではない。

毎日の規則正しい生活の中に「こんな風にしよう」という目標と時間帯を位置づけることにより、くりかえしと、なによりも集団の力によって、個人の中にも定着することは可能である。

栄光園の園生も二年前と比較すると、整頓する習慣や、清潔にする習慣は身につけてきたといえる。その点では、明らかに彼らは訓練され、そして「変わった」と、思うのである。習慣化のなされた後の方向づけは、指導員と共に、園生自身の今後の課題である。施設における規則正しい流れの枠がはずされた時、真の姿が動き始めるのではないだろうか。

園生が将来どんな形で、社会と接触してゆくかは全く想像できないが、ここで培われた良い習慣は持ち続けてほしいと願わずにはいられない。

× × ×

松風園に勤務して

指導員 佐藤 邦子

松風園に勤めて半月たちました。あつという間に過ぎた、何が何だかわからない困乱した半月でした。

私は採用試験の時に『精神薄弱者のための福祉というものは、社会連帯の立場で考えていかななくてはならないものであって……』などと、特殊教育概論の教科書に書いてあるようなことを書きならべ、自分なりに精薄者の教育などということも考えましたが、松風園に勤めて、それが現場を知らない者の机上の空論であったことに気がつきました。

私は、今まであまり精神薄弱者と接したことはなく、松風園の園生のように重度の人たちと会ったのは、三月十四日が初めてでした。その時は、ずいぶん大変な職業についてしまった、私にとまる仕事だろうかと、大いに弱気になりました。半月たった今も、その気持ちはあまりかわっていません。人間を対象とする職業は何でもそうでしょうが、精薄者の場合は、こちらの意思が思うように相手に伝わらないこと、また効果を早急に期待できないこと、まだまだいろいろな事などあって、本当にむずかしいと思います。

私は、精神薄弱者の教育、指導に

関しては全く無知であり、これから実際に起きるいろいろな事を踏み、経験しなければ何もわからない、指導員とは名ばかりの、精神薄弱者施設の職員ですが、園生の気持ちを少しでもわかることができるように努力したいと思えます。

松風園に勤務して

指導員 情野 薫

「初心忘るべからず」と、「仕事に精出すべし」との言葉を親より説かれて松風園に勤務しました。仕事の流れや園生になれる事、また自分は園生と共にどんな事ができるのか等と考えているうちに半月が過ぎてしまったようです。

さて、松風園での一日一日がとても早く感じられるのですが、それは物事すべてが初めての体験という事ばかりではないようです。園生と接している時は、心の扉が開くような心持ちになります。彼ら園生は知恵おくれ精薄というように、いわゆる「馬鹿」等と社会で言われているのですが「馬鹿」等と言っている社会の人々の方がよっぽど馬鹿ではないかというように思えることがあります。なぜなら一般社会では人をだましたり、嘘をついたり、人をおとしめる等、色々な争いがあります。もしも、園生が嘘やだまし

事をしたとしても、それはすぐ気がつくような可愛いものでしかないように思えるのです。彼ら園生の心の中は、一般社会人よりも純粹で飾る事を知らず、私などにはかえって反省する事が多く、そんな彼らと接することは、大いに心と心のふれあいを直接心に感じます。また、知能というハンデイーや指導員、園生という壁をのりこえ共に同じ時間について感じ方は違っても同じ体験と一緒にしているという共感が一日一日を早く感じさせるように思えます。

時には、彼ら園生にみつめられる時、そのもの言わぬ瞳の中に言葉にならないいいしれぬ哀愁を感じる時があります。そんな時、私も一緒に悲しくなる様な気がして一瞬どうしようもなくなるのですが、反対にうれしい時の顔の動きがとてすばらしく、こんな時彼らはすべての表現方法を駆使して、体一杯に喜怒哀楽の情をみごとに表現します。

こんな彼ら園生の心の構造に現代の人間はどうていかなわらないのではないのでしょうか。私は、園生の感情表現の豊かき、素直き、純粹きを素直な気持ちで学んでよい事ではないかと、半月あまりの勤務を終えて考えさせられた事です。

× × ×

……地区親の会だより……

——酒田市手をつなぐ親の会——

“会員どうしのつながりを

つよめて活動しよう”

酒田市手をつなぐ親の会は結成してから五年ちかくなっています。はじめは酒田市特殊学級親の会と、市立はまなし学園育成会の連合体的組織として発足したのですが、地域的組織であるべき親の会が、学校や施設の間ゆる附属的団体の連合体であることは矛盾していますし、地域的組織としての活動を発展させるうえでもよくないと考え、そのため会では、個人会員もふやし、運営や活動のしかたも、できるだけ連合体的色彩を、ださないようにしてきました。しかしまだ不十分なところがたくさんあり、どうしたらよいか悩んでいます。以下問題を簡単に述べ

各地区の方々からの御批判と御指導をいただきましたと思います。

去年九月、酒田市親の会では、県親の会庄内地区ブロック集会を主催しました。集会を成功させるため、酒田市親の会ではそれなりの努力をしましたが、わずかの会員の参加にとどまりました。そして、話し合いも期待どおりに深められたとはいえませんでした。もちろんこれは庄内地

区規模の集会であり、いろいろ特別の条件もありましたから、これだけで全体を判断するのは避けるべきでしょうが、やはりここには、主催をしたわれわれ酒田市親の会の弱点があらわれたと考えないわけにはいきません。会の活動でたいせつなことは、会員のかかえている問題を、みんなが力をあわせ一つ一つ解決していくことだと思えますが、そのためには、会議や集会で話し合いがしつかり深くおこなわれるようにならないければならないと思えます。

ところが酒田市親の会ではそれが十分でなかったと思っています。形式的に案件が処理されたり、発言もとくに行政機関からの出席があると質問やすぐその場での個々の要望になったりする場合がおおく、ほんとの話し合いにならないで終わってしまうことが多かったと思っています。これでは、参加する魅力がないといわれるのも当然かも知れません。これからは、参加者みんなが卒直に発言しあい、多様で複雑な問題が十分にだされ、それがみんなの心にしみ入

るように深い共感をもって受入れられ、それが共通の課題として活動にとりあげられるようになる、というように話し合いがすすむ会議や、集会にしなければならぬと思っています。そのためには、もっと役員どうし、役員と会員、会員どうしのつながりを強めるようにしなければならぬと思っています。

これは簡単にできることではないと思いますが、しかしどんなにむずかしくとも、このようにしない限り酒田市親の会の活動をつよめ、ほんとうに会員にとって魅力があり、期待のもてる会にすることはできないでしょう。そして問題をどんな小さなことでも、一つ一つ着実に解決しながら、会の力を一歩一歩つよめていきたいと思っています。

——あと——が——き——

このたびは「万世通動寮」のたよりを中心にして、会報をつくりました。寮生の声と保護者の感想を「親の会たより」に載せて、寮生の考えや、保護者のよるこびをお知らせいたします。

子どもたちの福祉の向上のためにこのような通動寮が、庄内・最上・村山の各地区にも早期にできることを、切に望んでやみません。

(はせがわ)